

まちもり叢書別冊（2016年1月プリント）

ブルーノ・タウトと山口文象

タウト日本日記を読み解く

街杜散人

ブルーノ・タウトと山口文象

タウト日本日記を読み解く

1. タウトが山口の結婚式に招待されて悩む

●建築家ブルーノ・タウトの日本訪問

日本が戦争に入ろうかとしていた1933年、ナチスのドイツを逃れて一人の建築家がやってきた。その4年間の滞在で日本の建築文化に足跡を残した。その足跡のほんの一部だが、山口文象（1902～1978年）も関わっている。

ブルーノ・タウト（1880～1938年）は、20世紀初めのドイツ表現派の建築家として、また、戦間期のワイマール共和国時代の政策であったジードルングと言われる中産階級向けの集合住宅の秀作を多く設計している。今もそれらは住まわれていて、一部は世界遺産登録になっていて有名である。

タウトは一時、ソ連で仕事をしたことナチスに睨まれて左翼の烙印を押され、逮捕リストにのったことを、あるルートからひそかに知った。その手を



ブルーノ・タウト

逃れて1933年にシベリア鉄道、ウラジオストク経由で日本にやってきた。そのときちょうど招請を受けていた「日本インターナショナル建築会」を頼ったのである。そして日本経由でアメリカに亡命するつもりが失敗して、1936年にトルコに去って行った。2年後、トルコで客死したのであった。

日本でのタウトは工芸デザインに携わるしかなくて、建築家としてはかなり不幸な人生だったが、日本の建築や文化について多くの著作を出して、日本の建築家や文化人に新しい刺激を与えたのであった。

タウトの日本での動静は、その詳しい日記で知ることができる。

●タウトを悩ませた山口文象の結婚式

タウトが日本にいたころ、山口文象は新進建築家として名をあげつつあった1930年渡欧の前は建築運動の活動家として知られ、1932年にドイツから戻ってきていきなり東京医科歯科専門学校附属病院（1934完成）のモダニズム建築で建築家として世に出た。日本でのタウトは、山口文象と何回か出会っていることは、タウトの日本日記で分る。

その出会いは、どこか妙な具合もある。最初はどこであったのか分らないが、1933年11月初めに、タウトは山口から画家の前田青邨邸への招待状を受け取った。

11月4日に日記。

「建築家の山口（蚊象）氏からも、岳父の前田青邨邸へ来てほしいという招きがあった。山口（旧姓は岡村）氏はすぐれた建築家だ、

某氏のひどいあくどさを知ら
してくれる（この男は正真正
銘のやくざ者だ）。山口氏は以
前グロピウスに就いたことが
ある。」

前田はその当時に山口文象
が婚約していた前田千代子の
父である。12月に蒲田に前田青邨邸を山口と共に訪れて、その純
日本家屋の寒さ、静謐さ、美しさに驚き感銘した記述がある。

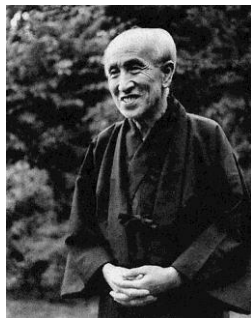
タウトは後に展覧会を観に行つて、日本画家としての前田を高く
評価している。

そして1934年1月16日に、山口から結婚式への招待状を受
け取つて、「思いがけないことだ。日本では初めてである。」と驚く。

1月21日の日記。結婚式は1月26日に迫っている。

「山口（蚊象）氏の結婚式のことである。いろいろ思い煩う。下村氏は、
京都―東京の往復切符を私達に提供しようと言ってくれる、『面白そ
うだから構わずに東京へ行つていらつしやい、しかしまたここへ戻
つてなくてはいいけませんよ。私がこの結婚式に出席したくない理
由は、山口氏と建築家一氏とは互に競争相手なので、どちらにも格
別に親密な関係を持ちたくないからだ。結局下村氏も私の意見に同
意し、またあとから上野君もこれに賛成した。』」

下村氏とは、大阪の大丸百貨店の経営者で、上野君とは日本イン
ターナショナル建築界の上野伊三郎であり、どちらもタウトを支援
した人である。



前田青邨

3月21日のタウト日記。

「夜、建築家山口（蚊象）夫妻を訪ねる（同氏は、私が結婚の贈り
物や祝電を取りやめたことについては何も触れなかった、それでも
お互いに格別気まずい思いをしなくて済んだ・・・）」

というわけでタウトは悩んだ末に、山口の結婚式にはかかわらな
かったのであった。

さて、タウトの日記に具体的なことは書いてないが、どのような
ことで悩んだのだろうか。

●山口文象と石本喜久治の確執

タウト日記の「某氏」や「I氏」という仮名になっているのは、

元は実名が書いてあるのを、訳者の篠田英雄がそうしたことは、篠
田自身がタウト日記の解説に書いている。

私のかかなり確度の高い推理では、この「某氏」と「I氏」とは、
建築家・石本喜久治（1894～1963年）のことであろう。石
本と山口は大猿の仲であったのだ。そしてタウトはインターナシヨ
ナル建築会の石本の世話になっていた。間にはさまたつタウトが悩
んだのは無理もない。

山口は1923年の関東大震災の余燼のなかで創宇社建築会を立
ち上げて、盛んに建築運動をしていた。通信省営繕課での図面画き
で実務の経験を積むとともに、この運動で建築会には少しは知られ
た。そして1926年から石本の下で設計の仕事をしていた。朝日
新聞社や白木屋デパートなどである。ここで設計の実務経験をしつ
かりと積んだのである。

石本事務所には、ほかに二人の創宇社建築会メンバーもいて、共に仕事と運動をやっていた。しかし石本は創宇社建築会の活動を嫌って、脱退を指示したことから、山口は石本と喧嘩をして、1929年に石本事務所を去った。他の2人もやめた。

そして翌年渡欧してベルリンのW・グロピウスのもとで働き、32年に帰国した。すぐに東京医科歯科専門学校附属病院の設計をはじめた。これが山口の建築家としての出世作となる。

1934年4月に歯科医専はできるのだが、その過程で石本が、山口はアカだとの怪文書を関係者に配って、仕事を妨害するという事件があった。当時の建築許可機関の警視庁へも送って、許可が停滞したという。タウトが知ったこの時期は、まだホットな事件であった。

この資料は無いが、わたしはこの件について、その頃に山口文象の下にいた二人（山口栄一、河裾逸美）から直接に聞いたことがあるから、このようなことがあったことはまちがいないだろうし、建築界では知られた事件だったらしい。

タウト日記には、この二人の確執を具体的には書いてないが、それを山口や他の建築家などから聞いて知っていたらしい。

石本は、タウトを招聘した日本インターナショナル建築会の幹部だから、タウトの世話をい



石本喜久治

ろいろと焼いていた。タウトは二人の確執を知って、出席するべきか否か困り果てて、支援者たちに相談して、結局は1934年1月の結婚式には出席しなかった。

もともと、タウトの石本への印象は、あまりよくない様子が日記にある。石本の建築作品について、例えば白木屋百貨店を見て「いかもの」との烙印を押している。

1975年にタウト日記が公刊されたときは、石本はこの世にいなかったが、もしも読んだら、あれほど世話してやったのにと、怒ったことだろう。タウト日記には、ほかに読んで怒った人は大勢いると思われる記述がいっぱい出てくるのが面白い。

このタウトを悩ました山口の結婚は、3年後に破局を迎えたのであった。ゴシップはこうして終わった。

2. タウトと山口が競合した建築計画

●タウトが有島生馬依頼のトルコ大使館の設計受注に失敗

タウトは日本滞在中に結局のところ、日本では建築を設計する機会には恵まれなかった。来日以来、仙台で工芸指導所や蒲田の陶磁器会社でデザイン指導、あるいはあちこちで講演をつづけながら糊口をしのいでいた。建築の設計の仕事をしたいのだが、機会に恵まれない。

何回か設計を頼まれて、図面や透視図を書いてはいるのだが、どれも実ることなく、時には日本の建築家にさらわれた。建たない設

計には金を払わない日本の習慣の前では、いつもタダ働きだった。できたのは僅かに熱海の日向氏別荘の地下室のインテリアのみであった。

そのタダ働きのひとつに、画家の有島生馬（1882～1974年）から依頼された建築計画があった。

1934年7月11日に、タウトは画家の有島生馬と出会っている。その日の日記。

「有島氏は現在の家屋と地続きの所有地に建築をしたい、ついでに私の日本における『建築の皮きり』としてその設計にあたつてほしいという。有島氏は好個の紳士だ。」

そして7月29日の日記。

「有島氏にトルコ大使館の建築平面図2葉を届けておいたが、今日は方角を考慮して少し変更を加えた見取り図を描き、これに設計の謝礼をも含めた費用見積もりを添えた。有島氏とトルコ大使館との交渉がどんな結果になるのかは、今のところまったく不明である。有島氏は、もしこれが不調に終わったら、例の土地へ外国人向きの宿泊所を建てたいと言っている。有島氏は私に好意を寄せているようだ（私も同氏の人柄が好きである）、まさか私を見捨てる様なことはあるまい。」

どうやら既にプランを提出済みだが、更に変更案を追加して届けたいらしい。これがだめでも「外国人向きの宿泊所」の仕事が来ると期待している。



有島生馬

だが1934年10月7日のタウト日記に、有島に見捨てられたことが書いてある。

「数か月前に有島（生馬）氏の依頼で、トルコ大使館の設計をしたことがある。これについていつか同氏に手紙を出したら、今日その返事を受け取った。有島氏の言い分は、あの件はトルコ大使館が処理すべき事柄で、自分には全く係りが無いというのである。井上氏はこういういざこざは、日本ではありがちなことで、しばしば不快な事態を惹き起こすものだという。だがその手紙は、なにも補償を要求したものでなく、ただ仕事の価値をありのままに述べたに過ぎないのである。」

井上氏とは、有島を紹介した井上房一郎で、後にタウトは高崎の井上工房に雇われる。タウト支援者の一人である。

ドイツ流の理知的な言葉と日本流の曖昧な解釈とのあいだで行き違いがあったらしく、タウトはこの設計受注には失敗した。そうなったら、「外国人向きの宿泊所」の設計受注へとフォローすればよいのに、怒ってしまったらしい。

この年のクリスマスに、タウトは有島からクリスマスプレゼントを受け取って、設計料の9分の1くらいの値段のものと、また憤慨している。

タウト側のこの件の記述は以上であるが、山口文象の側から見ると、この続きがある。実は、このタウトが受注失敗した有島生馬のプロジェクトは、山口文象が「外国人向きの宿泊所」を完成させた。もちろん、これはわたしの推理であるが、ほぼ間違いない。

●山口文象がタウトの失敗した有島のプロジェクトを実施

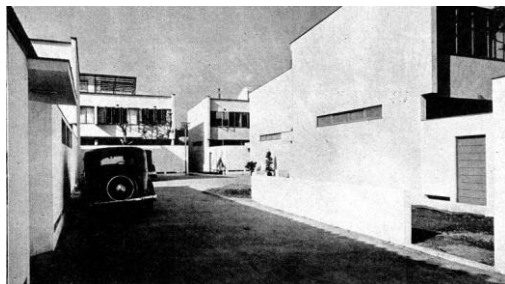
有島がタウトに設計を依頼した土地は、山口文象の設計で1936年8月に建った「番町集合住宅」の場所らしい。そこは東京の麹町区六番町である。有島生馬の兄の有島武郎の住宅であったが、武郎の死後は生馬が管理していた。

現在そこには、出版業の文芸春秋社の社屋が建っているが、1945年の空襲で焼けるまでは、「番町集合住宅」が建っていた。そしてそれはタウトに有島が語ったように、「外国人向けの宿泊所」つまり外国人向けの賃貸アパートメントである。

有島は、タウトと縁が切れた後か、あるいはそれよりも前か、それを山口に設計を依頼したのだった。タウトはまた日本建築家に横取りされたのだった。

有島と山口との出会いは分らないが、山口には画家の知り合いが大勢いて、安井曾太郎や菊池一雄などいくつもアトリエ設計をしているから、その線であったのだろう。

当時の新聞（1936年だ）が新聞名や日付は不明、山口文象建築事務所（資料）に、「集合住宅（ジードルング）を有島氏が



番町集合住宅

計画』との見出しで、透視図つきの記事がある。

「故有島武郎氏が生前の作品中に或は書簡文中に「番町の家」としてのせられ有名だった麹町区下六番町10の邸宅はその後一時文芸春秋社と平凡社が仮社屋に借りていたことがあったが最近七百坪の名庭は荒れるにまかせペンペン草やあざみの花が咲いていたが、今度令弟有島生馬氏が同所に純独逸風の集合住宅「ジードルング番町の家」を立てることになり思い出の邸は沢山の鷹職が入って取り壊している。「ジードルング番町の家」は先日本紙に掲載した「町田外人街」と同様に在京外人、中流以上の人々に、ホテルより手軽に在来のアパートより一層機能的に、家一軒借りるより文化的な住み家を与へる目的で、青年建築家として水道橋の東京齒科医専その他進歩的なデザインで有名な山口蚊象氏がデザインに当り、ドイツのウォールグロツピユース氏流のテイピカルなジードルングの設計を終り目下建築許可の申請中で八月末日まで竣工の予定である。」

ウォールグロツピユースとは、山口文象がドイツで師事した

Walter Gropius のことであろう。

そこに有島生馬の談も載っている。

「住宅地としてはこの辺は東京一等地ですし、欧州を旅行してかねがね本場のジードルングにあこがれていたので、一念発起いま山口君と大童になつていいものにしようと頭をひねっています。地代を支払つてはこの仕事は引き合いません。とにかくスーツケース一つ提げてくればすぐ住めるものに、しかも外装は飽くまで瀟洒たるものにします。」

1936年11月号の雑誌「国際建築」に番町集合住宅の写真と



ブルーノタウトによる集合住宅
ベルリン・ブリッツ・ジードルング



日本歯科医科専門学校附属病院

山口の解説文が載っている。解説文をこう締めくくる。

「この「番町の家」が本当の意味におけるジードルングであるかどうかは別にして、この計画を実施された有島先生の英断に敬意を表し、また若輩の私に設計工事に関する一切を一任して下さったことを心から感謝を述べたいと思う。」

皮肉なもので、その当時ならばジードルング（集合住宅）の設計では世界中でこの人右に出る者はいないであろうタウトに接触していたのに、その起用にならなかったのは、日本の集合住宅のために実に惜しかった。一方では、山口文象がそのジードルングの「番町集合住宅」を設計して、更に名を挙げることができたのは、山口

の弟子の端くれのわたしとしては、よかったとおもう。

山口文象が「本当の意味におけるジードルングであるかどうかは別にして」と言っているのは、金持ち外国人向けの賃貸集合住宅が、労働者層を対象とする社会政策としてのドイツのジードルングと同じとは言い難いと思ったのであろう。

ドイツで本物のジードルングを見てきたし、グロピウスの下でジードルング設計にも携わった山口文象だから言えることだろう。

●タウトが山口文象建築作品個展を観て酷評

ところで、タウトはその土地に山口文象がジードルングを設計したことを知ったのだろうか。时期的にはタウトが日本を出たのは1936年10月15日だったから、知ったとしてもおかしくないが、そのような記述は日記に登場しない。では、タウトが同じ土地に別の計画で関わったことを、山口は知っていたのだろうか。

「山口文象建築作品個展」と銘打って、その自信作を展示したのは1934年6月13日から17日まで、銀座資生堂ギャラリーでのことであった。展示したのは、日本歯科医科専門学校附属病院、小泉八雲記念館、アパートメント試作、アトリエー、アトリエロ、協同組合学校、関口邸茶席、モデルルームの8つの建築作品である。多分、図面と写真、一部は模型もあったかもしれない。

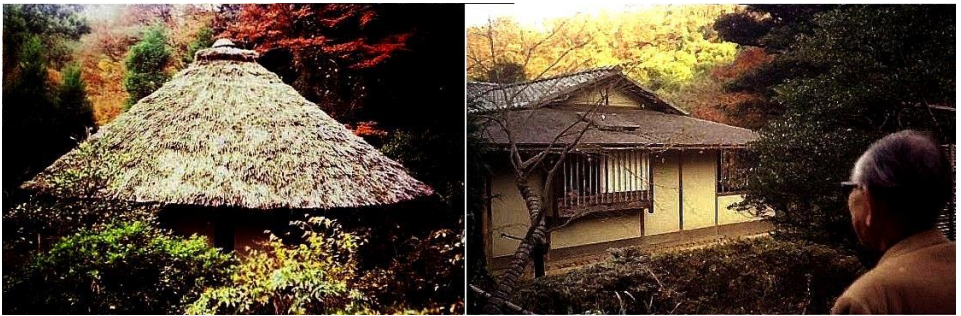
1934年6月15日のタウト日記。

「建築家山口蚊象氏の作品展覧会を観る（同氏はドイツでグロピウスの許にいたことがある）。作品のうちでは茶室がいちばんすぐれている、——山口氏はここでまさに純粹の日本人に復ったと言つてよい。その他のものは機能を強調しているにも拘らずいかにも硬い、まるでコルセツトをはめている印象だ。とにかくコルビュジエ模倣は、日本では到底永遠にするものでない。」

タウトにももちろん招待状を出したに違いないが、やつてきタウトは酷評である。唯一のほめている関口邸茶席は、コテコテの和風建築であつた。展示作品のうち唯一の和風デザインである。

日本齒科医科専門学校は、山口が帰国してすぐの設計で、彼の出世作ともいふべき、時代の流行最先端を行くモダンデザイン建築である。

小泉八雲記念館は、松江市の武家屋敷街にある旧八雲住居跡に建つ。



関口邸茶席 右端は山口文象（1972年）

これはモダンデザインというよりは新古典主義的な影をもつ洋館であつた。ワイマールにあるゲーテ記念館を模したと言われるが、本当かどうかわからない。現在あるゲーテ「ガルテンハウス」のことならば、ずいぶん違う。

そのほかのアパートメント試作、アトリエⅠ、アトリエⅡ、協同組合学校は、展覧会用の試作だつたのだろう。

ここで気になるのは、「アパートメント試作」なるものである。このころ山口がとりかかつていた可能性があるアパートメントならば、「番町集合住宅」と「青雲荘アパートメント」の二つがある。

もしも展示作品が番町集合住宅ならば、有島は山口にアパートメント設計を依頼しながら、いっぽうではこの後の7月11日にタウトに会つた時に、同じ土地にトルコ大使館設計依頼という、二股をかけたことになる。そして、トルコ大使館が不調になつたら「外国人向きの宿泊所」にするといい、それを山口文象に依頼してであると正直に言つたのかもしれない。

だからタウトは有島にキヤンセルされても、フオーローしなかつたのであろう。あるいは山口とは言われなかつたが、怒つてしまつてフオーローしなかつたのかもし

個展ポスター



れない。

このあたりは類推して、勝手に面白がるしかない。

山口としては作品展で、ドイツから持って帰ったモダンデザインを、タウトに褒めてもらいたかったであろうに、それらはけなされて、和風の関口邸茶席のみが高く評価されたのだった。岳父の前田青邨の絵のように高い評価をされなかったことは、彼にとつては皮肉なことだった。

しかし、タウトがあちこちを見て発している、極めつけの「いかもの」(ドイツ語ではキツチュ)と言われなかったのだけは、とりあえず幸いであつたか。

3. タウトが山口にジードルンゲ論自筆原稿を贈る

●タウトが設計助手として山口のスタッフ河裾逸美を借りる

タウトは1934年8月から、高崎にすっかり腰を落ちつけて、井上工房で工芸デザインをしている。時々東京へ行って講演したり、建築家たちと付き合ひ、展覧会などに出かけている。

1934年10月26日のタウト日記。

「午前、美術研究所に所長の矢代幸雄教授を訪ねる。矢代教授はヨーロッパ特にドイツの芸術に精通し、ドイツの学者とも親交があり、先ごろはまたベルリンの日本展覧会を主宰された。立派な人柄の芸術学者である。それから同氏の友人で建築家の山口(蚊象)、谷口(吉

郎)と、バーナード・リーチ氏の迎賓展覧会を見た。作品はいずれも決して悪い出来ではない。同行の建築家たちはリーチ氏のものあまり好まない様子であつた。つまり作風が日本化し過ぎているというのである。」

有島生馬のプロジェクトで、タウトは山口に仕事を取られたが、それを互いに知っていたか知らないのか分らないが、山口とタウトの間にはなにも起きなかったらしい。

高崎では、井上工房で数々の工芸品や家具のデザインをして試作を続けるが、製作現場とタウトの意図とのすれ違いにイライラしている様子が日記にある。それでも、井上の経営する軽井沢の店で、タウトデザイン工芸品を売り出しつつある。時には日本住宅の設計を頼まれて、設計図を書いている。彼のもとには3人の助手がいたらしい。

1934年12月10日のタウト日記。

「私の助手諸君のうちの一人(儘田氏)は少林山、二人(水原、河裾)の両氏)は高崎で、全試作品(実際に製作されたものばかりでなく、図面だけのものも含めて)のカタログを、私の指示に従つて編集している。」

この3人所助手の内の河裾とは、河裾逸美のことであると訳者註にある。河裾逸美(1904?)は、山口文象が所属していた通信省営繕課の同僚であつた。彼も山口等が1923年関東大震災の余燼の中ではじめた「創宇社建築会」の活動に、1927年から参加している。

山口文象が1931年に帰国後、すぐにとりかかった東京歯科医科専門学校附属病院の設計にあたっての山口の仕事の最初の相棒、つまり山口文象建築事務所の最初の所員である。1937年にまで在籍していたから、山口の最盛期のスタッフであった。

河堀が何時からタウトの助手であったのかわからないが、山口がタウトに貸したのだろうか。10月に一緒にバーナード・リーチ展を観に行ったとき、タウトから建築図面を書く助手がほしいと相談されたのだろうか。

そこで気になったので、ほかにタウト関連の本を探したら、「ブルノ・タウトへの旅」(鈴木久雄 2002 新樹社)にこれに関する記述を見つけた。

その頃、井上工房はタウトのデザインによる製品を数多くつくるようになり、軽井沢に「ミラテス」という名の販売店舗をもっていたが、更に東京の銀座の交詢社ビル向かいのビルの1階にも店を出すことになった。

「店の詳細設計は、助手の河堀逸美が実測をつくって、タウトの指示で作図をした。河堀は元通信省経理局営繕課の雇員だった建築のよく分る人物で、タウトの信頼を得ていた。」(ブルノ・タウトへの旅) 150p

なるほど、店舗のインテリア設計のできる建築設計助手をタウトは欲していて、それを山口文象には話したのだろう。

そうして銀座に「ミラテス」が開店したのは1935年2月12日だった。ところが、1935年1月19日のタウト日記に、また河

堀が登場する。いろいろと井上工房での愚痴を書いた後に、このようにある。

「河堀(逸美)氏は、つい近頃井上工房を辞めてしまった。この人は、自分だけでも貧しいのに、僅かな俸給を勉強中の弟さんの為に割いていた。

河堀氏の月給は四十五円だし、水原氏のは恐らく三十円にも達しないだろう。河堀氏は文字通り飢えんばかりの生活をしていた。昼の食事でも歯が痛いからと言っては、いつも十銭の弁当で済ませるといふ風であった。」

水原とは、最後までタウトの助手であった水原徳言で、日本での唯一のタウトの弟子である。

ということ、河堀はタウトのもとを去った。安月給で雇われていたが、ミラテスの仕事も終わってクビになったのかもしれない。山口文象建築事務所に戻って、更に2年ばかり在籍した。山口には洋風と和風の両方の系譜の建築があるが、洋風が河堀の担当だった。河堀は戦後には大阪に住んで、建築設計をやっていたわたし



創宇社建築会メンバー(1930年 第8回医覧会)
左から河堀、竹村、廣木、小川、渡川、山口、海老原、野口

は何度か大阪の安孫子にある自宅を訪ねて、話を聴いたことがあるが、タウトのことを聴いたことはない。

●山口文象資料にあるタウトの自筆原稿のこと

山口文象がドイツにいた1931〜32年には、タウトはベルリンのシャルロッテンブルグ工科大学の教授だったが、山口文象の滞欧手帳にはタウトの名は登場しないから、出会ったかどうかかわらない。

山口文象とタウトの出会いに関しては、ここまでの話は日本でのタウト日記だけが資料であるが、山口側にも唯一のタウトとの接触を示す強力な資料がある。それは、タウトから贈られたという自筆原稿のカーボンコピーである。

RIA (株アール・アイ・エー) に保管してある山口文象資料の中に、『Siedlungs-Memoiren』と題する、手書き原稿45頁のカーボンコピーがある。原稿末尾に「Hayama, 30. 8. 33 B. T」とある。

別の紙が表紙に添えてあり、そこに山口文象の筆跡で「ブルーノ・タウトから贈られる」と記してある。つまりこの自筆の葉山と目付とB. Tはブルーノ・タウトのサインである。本文と筆跡が異なるから、本文は秘書のエリカ・ヴィッティヒによるのだろう。タウトの原稿はほとんどが口述であり、エリカが筆記していたそうである。

1933年8月30日の日付をもとに、タウト日記にそれを探したら、1933年9月2日に「論文『ジードルング覚書』(45頁)を脱稿」、訳者の註で『「ジードルング覚書 Siedlungs-Memoiren」】とあるからこれだろう。

この原稿をいつ山口文象が贈られたのか分らないが、12月に前田青邨邸であつたときだろうか。

この『Siedlungs-Memoiren』は「ジードルング覚書」として篠田英雄訳『タウト 日本の建築』(春秋社1950年)に収録されている。ただしこれはのちの改稿原稿である。

山口文象の持っている自筆原稿が初稿だろうが、その翻訳版は公開されていない。だが、山口の翻訳になるタイプ原稿が山口文象資料に保管されている。その日付は1948年8月30日とあるから、山口はタウトからもらったまま持っていたが、戦後ヒマな時に翻訳したのであろう。多分、どこかの雑誌に発表するつもりだったのだらう。

ただしこの訳文はかなりの悪文だから、雑誌に売りこんでも掲載されなかったのだろう。山口文象による全訳文をここに掲載しておいた。

<https://sites.google.com/site/dateyg/1946burunotaut-siedlungs>

●タウト送別会で山口は青邨の色紙を贈る

タウトは日本を目的地としてやってきたのではなく、日本経由でアメリカに行くつもりだった。しかし、水原徳言によると、秘書のエリカ・ヴィッティヒのビザを取ることができなくて、あきらめたそうだった。

タウトは故国に妻子をおき、秘書のエリカとの間にできた子もおき、エリカと二人でナチスからの逃避行の先が日本だったのだ。エリカには、もうひとりの子もいたが置いてきた。火宅のカップルであった。

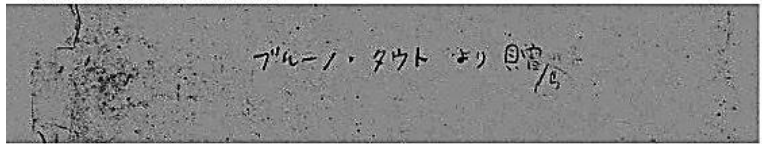
しかし本職の建築設計の仕事はないし、工芸デザインも順調ではないし、日本の気候が体に合わなくて病気がちだったから、なんとして日本を出たかった。日記をドイツの親戚や知人に送るとともに、ヨーロッパ方面の知人への連絡を欠かさなかった。

そして1936年9月30日に、朗報がトルコのイスタンブールからやってきた。ケマル・アタチュルク大統領による新生トルコ共和国の芸術アカデミー教授に招かれたのだ。タウトは大喜びですぐにも出立することになる。

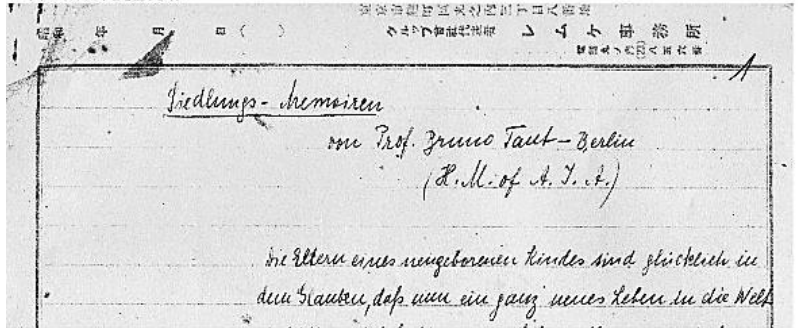
1936年10月10日のタウト日記には送別会の記事がある。

「井上氏の肝煎で、同氏のほか吉田（鉄郎）、蔵田（周忠）、斎藤（寅郎）の諸氏が幹事役となって、盛大な送別会を催してくれた。会場に当てた赤坂幸楽の二階には、五十人ばかりの知友が集まった。（中略）山口（蚊象）氏からは岳父（前田青邨氏）の色紙を頂戴した。私への餞けの言葉は、いずれも賛辞ばかりで、美しい屍に捧げる頌辞でも聞いているようだ。そこで私は、どうか私に対する非難のお言葉も頂戴したいものです、と言った。」

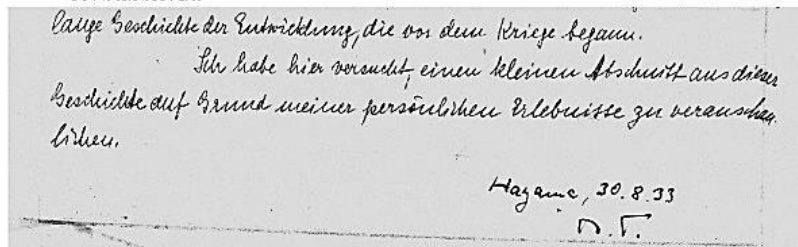
タウトの原稿に添えられている山口文象の筆跡



タウトの原稿の書き出し部分



タウトの現行の文末部分



山口文象はタウトとの最初の出会いは山口青邨がらみだったが、最後の別れもまたそうであった。石本喜久治を間にしてむしろ困らせたとと言ってもよいが、設計作業で困っているタウトに事務所スタ

ツフの河裾を貸したので、帳消しになったかもしれない。結局のところ建築家としての深い付き合いはなかったのだろう。

そして、タウトが設計した可能性もあった「番町集合住宅」を、山口が設計したという因縁はある。

ブルーノ・タウトは多くの日本の建築家たちと交流したが、結局のところ、タウトが力量を高く評価した日本人建築家は、吉田鉄郎だけだったようだ。吉田は当時は逓信省所属の建築家で、東京駅前
の東京中央郵便局（現在は改築してKITE）の設計者として有名である。山口文象は吉田に逓信省時代に出会っている。

また建築設計作品らしいものは、インテリアデザインの日向利兵衛別荘地下室だけと言ってよいだろう。幸いにも今は保存公開されている。

タウトの日本の滞在の日々は、総じて気の毒なことだったが、日本の建築界としてはその聲咳に接したことでよかったと言える。しかし彼の建築の腕前を発揮させることができなかったのは、実に惜しいことだった。

（完）

注…2015年8月 腰椎骨折療養中にヒマなので『タウト日記』
（篠田英雄譯1975岩波書店）を読んでこれを書いた（伊達美徳）